

# 協力隊を育てる会ニュース

ひとりの若者の海外ボランティア活動によって、国際協力の輪が限りなく広がることを理解し、その活動を支援するために『協力隊を育てる会』は歩みつづけてい

- ◆題字：茅 誠司
- ◆発行所：一般社団法人 協力隊を育てる会
- ◆発行人：山本保博 ◆編集人：大石精一
- ◆毎月1日発行 定価1部110円(本体100円)



2021  
12  
第447号

一般社団法人  
協力隊を育てる会  
〒101-0052  
東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階  
TEL:03-5244-5093 FAX:03-5244-5095  
E-mail: news@sojocv.or.jp

青年海外協力隊/海外協力隊

地域	派遣中人数	地域	派遣中人数
大洋州	3	東南アジア	40
北米・中南米	11	東アジア	2
中東	16	中央アジア	3
アフリカ	133	南アジア	6
欧州	6	合計	220

2021.10.31現在

おめでとうございます

## 岐阜県青年海外協力隊を支援する会が 第17回JICA理事長表彰を受賞

JICAでは、毎年、国際協力事業を通じて開発途上国の人材育成や社会発展に多大な貢献をされた個人・団体に対し、その功績を讃えて「JICA理事長表彰」を実施しているが、第17回目を迎える今年度は、岐阜県青年海外協力隊を支援する会(会長 渡辺和義)を含む計42の個人・団体の受賞が決定した。

岐阜県支援する会は、1991年に設立、今年で30周年を迎える。

毎年、出発隊員の壮行会、帰国報告会を開催している他、帰国隊員と途上国の料理を囲みながら異文化理解を深める「食文化交流

の集い」を20年以上にわたり開催、他にも県民に対して協力隊事業の理解促進を目的としたシンポジウムをこれまでに15回開催している。また、災害復興に携わる帰国隊員の活動助成、農協と連携した帰国隊員の新規就農支援を行うなど、地道な活動を続けている。

表彰式は12月9日(木)にJICA本部(千代田区二番町)会議場にて開催。昨年はオンラインのみによる開催であったが、新型コロナウイルスの感染状況が抑えられている状況を受け、今年度は対面とオンラインを併用する形式にて開催予定。

おめでとうございます

## 2021年 秋の叙勲

【旭日小綬章】

水沼 富美男 さん

青年海外協力隊とちぎ応援団副会長  
(元株式会社とちぎテレビ代表取締役社長等)

【旭日双光章】

松本 真理子 さん

奈良JICAボランティア応援団理事  
(元奈良県教育委員会委員長)

【瑞宝双光章】

天野 暢保 さん

愛知県青年海外協力隊を支援する会副会長  
(元安城市文化財保護委員長等)

八角 幸雄 さん

千葉県JICA協力隊を育てる会理事  
(元外務省職員、青年海外協力隊OB)

## 国際協力時評

# 現場を知る隊員の活躍を後押しします



まつした しんぺい  
松下 新平

参議院議員  
政府開発援助(ODA)等に関する特別委員長

1966年宮崎県生まれ。法政大学第二法学部卒、宮崎県職員、参議院議員秘書、宮崎県議会議員(2期)を務め、2004年参議院議員初当選。現在3期目。総務副大臣兼内閣府副大臣、国土交通大臣政務官、参議院災害対策特別委員長を歴任。他には、自民党総務部会長、外交部会長、財務金融部会長、人事局長。現在、政府開発援助(ODA)等に関する特別委員長を務め、JICA議連などでも活動。

私は、参議院議員として国会の内外で開発援助に関わってきました。現在は政府開発援助

(ODA)等に関する特別委員長を務めるほか、超党派の日本の国際協力-特に青年海外協力隊-の活動を支援する国会議員の会(JICA議連)等でも活動しております。

ODA等特別委員会は、2006年に設置された参議院独自の委員会であり、国会としてODAへ積極的に関与していく観点から、ODA予算の適正な執行を始め、開発協力に関する諸問題について様々な調査を行っています。また、参議院は、昨年度以降、新型コロナウイルス感染症の拡大により中断しているものの、毎年度、ODAに関する議員調査団を途上国等へ派遣しており、これまで78か国・地域で延べ248人の議員が調査を行っています。私自身、これまで3回の調査派遣に参加して感じたことは、開発協力の現場を見て、知って、その上で議論することの大

切さです。

私の地元の宮崎県で、都農町産のぶどうを使ったワイン作りを行う小畑暁さんは、協力隊員として、ボリビアでオレンジなどを使った農産物加工を通じて現地の人々の生活向上に尽力された経験をお持ちです。宮崎でのワイン作りへの取組は、土壌改良から始め、軌道に乗ってからも大量生産に走らず、地産地消、地元都農のぶどうを使うことにこだわりました。小畑さんは、今日の成功について、異国の地で現実的な方法を模索する過程で複眼的な視点が養われたと、協力隊の経験を振り返っておられます。

それぞれの国で日本の「顔の見える援助」の一角を担っている青年海外協力隊員のはつらつとした姿は、非常に印象的で、感動を覚えますが、現場での活躍を通じた人材育成の機会としての協力隊の側面も、また特筆すべきものと言えます。今後とも、世界の課題解決を通じ、相互理解と発展に資する協力隊員の活動、帰国後の更なる活躍に大いに期待するとともに、これらの後押しとなる取組を推進して参ります。



世界もあなたも、可能性に満ちている。

お問合せ  
JICA 海外協力隊募集事務局

042-404-5021  
contact@jocv.info

まずはWEBサイトへアクセス!

JICA 海外協力隊 検索



<https://www.jica.go.jp/volunteer/>

いつか世界を変える力になる。

青年海外協力隊 シニア海外協力隊 JICA

## 追悼 中根 千枝 元会長

10月12日、中根千枝元当代会長が老衰のため逝去されました。94歳でした。中根元会長は、ハワイの研究所在籍時にアメリカ平和部隊に講義を行ったこともあり、1965年の協力隊創設の際に第1次隊の訓練生に講義を行いました。

本格的な協力隊との関りは、伴正一第2代協力隊事務局長と茅誠司初代協力隊を育てる会会長からの強い要請を受けてからのことで、1976年の当会の発足時には副会長として、1986年からは茅会長の後を継ぎ、2代日会長として12年間、その後も2012年まで顧問として通算36年間にわたり、協力隊事業のために尽力されました。

社会人類学を専門とする中根元会長は、日本人が異文化と接した時の問題点について研究。企業駐在員等を研究対象としていた当初は、「日本人の異文化への適応」を悲観的にとらえていたものの、協力隊員を視察したことで、日本人で

も異文化に適応できる力があることを確信。日本の将来はこうした人材を育てていけるかにかかっており、「隊員の経験が浪費されないよう」広く社会に発信し続けました。特に1997年に経団連において開催された「国際協力懇談会」では、各企業に対して従業員の1%を国際協力関係担当者として配置する提案を行い、注目を集めました。

また、OB支援プロジェクト（現、帰国隊員/青年支援プロジェクト）、小さなハートプロジェクト、視察の旅など、育てる会の中心的な事業が開始されたのも中根元会長の時代であり、育てる会の事業の基礎も作られました。

中根元会長の功績を忘れることなく、今後も当会は協力隊事業の理解と支援を訴え続けて参ります。

中根元会長のご冥福をお祈り申し上げます。



中根 千枝

1976～1986年 社団法人協力隊を育てる会副会長  
1986～1998年 会長(第2代)  
1998～2012年 顧問

(本の写真)中根千枝著。協力隊10周年記念事業の一環として1978年に講談社から刊行された「協力隊シリーズ本」の一冊。「協力隊3部作」と言われ、多くの人に読み継がれてきた。

## 協力隊OBが県優良青年農業者表彰

群馬

群馬県甘楽町で就農、高野農園代表の高野一馬さん(平成18年度2次隊/野菜/モザンビーク)が、第57回 県優良青年農業者表彰(群馬県、上毛新聞社の共催)を受賞しました。

高野さんは、協力隊派遣前に甘楽町でNPO法人自然塾寺子屋(理事長矢島亮一、パナマOB)で技術補完研修を受け、県外から来る研修生や外国人を快く受け入れる懐の深さ、そして何よりも地元農家の方々の人柄に惹かれ、帰国後は甘楽町での就農を決意しました。

積極的に耕作放棄地を借り受け、ナスや長ネギ、レタスなどの露地野菜を中心に栽培、生き生きと農業に励む姿は地元の人にも少なからぬ影響を与えています。

表彰式は11月15日に甘楽町役場で実施、コロナ禍の影響のため残念ながら群馬県知事から直接表彰状を手渡されることはありませんでした

が、「今後10年を見据えて新たな気持ちで前進します」とこれまで支えしてくれた周囲の方に感謝を述べました。



新型コロナウイルスの感染防止のため、元JICA職員だった山本一太群馬県知事から直接表彰状を受け取ることは叶わなかった。

## 食育の講義に育てる会カレンダーを活用

北海道

10月22日(金)に開催された第72回全国学校給食研究協議大会北海道大会(文部科学省ほか主催)にて、今年度の育てる会カレンダー10月ページに掲載されている小林礼奈さん(2018年度1次隊・栄養士・ケニア)の活動が紹介された。これは、共栄大学教育学部客員教授の今村信哉氏が講義『人生100年時代における食育—生涯にわたって生きる力を育む食育—』にて取り上げたもの。

ケニアのナイロビ日本人学校にて指導経験がある今村氏は、現地でも協力隊の活躍ぶりを耳にしていたという。今回、全国の栄養教諭に自身の海外経験と小林さんの写真を紹介しながら、グローバル化への食育対応を講義。「SDGsの理解は食育でも重要。SDGsの実践そのものである協力隊活動は食育の参考になるはず」と期待を寄せている。

寄稿

## 農業を通じて志を持てる世界を創る。

綿貫 大地さん Agri-Mission代表  
2017年度2次隊/コミュニティ開発/ベナン

新聞奨学生として販売店に住み込みながら大学に通う。NGOのプログラムで大学を休学し、ザンビアでボランティア活動に従事、国際協力の道に進み将来アフリカに戻ることを決意。大学卒業後、イギリスの大学院で開発学を学ぶも念願だったJICA入職は叶わず大手トラック・バス会社に就職。幹部候補生となるがアフリカへの想いが勝り、アフリカに進出している洗剤・消毒剤メーカーに転職、中南米初となるメキシコ版社の立ち上げ等に係るもアフリカに近づけない焦りを感じていた時、偶然に見かけたポスターをみて協力隊に参加。任期終了後、ベナンで現地法人を設立、パン屋の経営に従事し、カレー屋もオープン。コロナ禍で日本に一時帰国するが、ベナン×農業×ITチームの構想を温め2021年より本格的に始動。

先日「あの農家さんたち元気になっているの?」母からそう聞かれて、「うん、元気だよ」と愛想なく答えました。母は私が協力隊員の時にベナンを訪問しており、私が一緒に活動していた農家さんをふと思い出して質問してきたようでした。その時は簡単に答えましたが、実は彼らと今も交流があり、さらにいうと、今では彼らが作った野菜を自分の会社で販売できているという事実、とても幸せを感じています。

私は2017年から2年間、ベナン共和国でコミュニティ開発隊員として、農業の公的機関の地方支所に赴任、野菜農家の収入向上プロジェクト

を推進していました。気候に負けないくらい人々は温かく、生活はしやすかったものの、出会った農家さんの殆どは農業だけでは生きていけず、バイクタクシーの運転手などの副業をしながら辛うじて生活していました。苦しいながらも皆、農業に対して真摯に向き合い、一生懸命農作業を行っている状況に悔しさを感じ、この状況を改善し、持続性を求め、さらに彼らの自立を促すために、2021年3月にAgri-Missionという会社を設立しました。創業パートナーで副代表を務めるのは、協力隊の時に一緒に活動していた野菜農家グループのリーダーです。

Agri-Missionのビジョンは、『農家の収入や生活の質の向上に貢献し、農家の自立を促すこと』です。農村部で作られた野菜を都市部の消費者に配達します。アプリを通じて注文を受け、支払いもモバイルマネーを利用するなどITを活用していきます。先日クラウドファンディングを実施し、ありがたいことに248人の方々からご支援いただき、その資金を元に実店舗経営の準備を進めています。実店舗を構えることで、お客様と直接コミュニケーションができ、私たちが提供する野菜を直接手にとってもらえ



パートナー契約を結んでいる農家さんを訪問

ます。そこから配達の注文に繋がれたらと考えております。また独自のアプリケーションの開発も進めていく予定です。

一見順調そうに見えるかもしれませんが、利益獲得まではまだいろいろと改善が必要です。今後もみなさまからのアドバイスをいただきながら、目の前のことを一つ一つやってみようと思います。

Agri-Missionという名前には「農業=Agri+志=Mission」という意味を込めています。農業を通じて、一人でも多くの方が志をもてる世界にしていきたいと考えています。読者の中でもし、このベナンという地で、農家さんのために、Agri-Missionでインターンしてみたい!という方は、是非ご連絡ください。

【ご連絡先】daichi1005555@gmail.com



## 日本も元気にする青年海外協力隊OB会 ③7

自分らしく生きることが  
自分の周りを笑顔にするみやぎし まこと  
宮岸 誠さん

小山市市民活動センター コーディネーター  
平成25年度4次隊/コミュニティ開発/パプアニューギニア  
奈良県出身。ワーキングホリデーでオーストラリア、カナダ  
在住の後、協力隊に参加。パプアニューギニアから帰国した  
後、(公社)青年海外協力協会に入職。復興支援員として宮  
城県内の牧場で羊飼いとして働く。協力隊の先輩の誘いを受  
けて、現在、小山市市民活動センター職員としてNPOや  
市民活動を支援している。

青年海外協力隊ではパプアニューギニア(PNG)のマヌス州行政に配属となり、プロジェクト調査と評価の実施業務を行いました。一方で「世界中の人の笑顔を作りたい!」そんな想いで生きてきた僕は、配属先業務の傍ら、マヌス州の人たち皆が笑顔になる活動を模索しました。行き着いた先はPNG文化の素晴らしさ、大切さをPNG人に伝える活動。PNGと日本文化を掛け合わせる祭りやPNG伝統楽器とデザインを組み合わせたコンテストなどを企画、実施しました。これらを個人の活動に留めず、配属先だけでなく近隣の学校や村、団体、友人など、自分に関わりのある人たちを巻き込み、僕を含めたマヌスの人皆が笑顔になるように尽力しました。

帰国するタイミングで気付いたのは、笑顔に

しようと思っていた対象が「世界中の人」でなく「自分の周りの人」になっていたこと。協力隊の経験で「自分らしく生きることが自分の周りを笑顔にする」と確信した僕は、職種、業種、働く場所を問わず、無理せず自分らしく生きることができる環境を探しました。その結果、地元奈良を離れ、宮城県の沿岸部から内陸部を経て、今は栃木県小山市で生活しています。

僕は現在、社会貢献活動を行う人や団体を繋ぐことや、そのような人たちと協働して市民が笑顔になる環境を整える仕事をしています。栃木県の小山市市民活動センターのコーディネ



相談者の想いに寄り添い、一緒に考える(右、宮岸さん)。

栃木県で  
活躍するOVを  
3回シリーズで  
ご紹介します。

栃木県  
小山市



学生と社会人の交流の場を提供する「テーブルde遊ぼう家」を大学生と立ち上げ、サポート。

ネーターとして日々、センターを訪れる人と向き合い、話し合い、喜びを分かち合っています。また、プライベートでは「サポート屋さん」と名乗り、今までの人生で培ってきた知識、経験、技術を使って、僕の周りの頑張る人をサポートする活動をしています。コロナ禍でオンラインコミュニケーションが当たり前になったこともあり、遠方の方のサポートもしています。

そんな僕の今の想いは、仕事でもプライベートでも僕と関わる人が皆笑顔で幸せになること。そのために毎日笑顔で暮らす、それだけはいくらでも変わりません。

## 日本も元気にする青年海外協力隊OB会

日本でも貢献したい協力隊OBOG有志で2015年に結成。協力隊の経験やネットワークを活かし、互いの情報交換を行いながら地域づくり等の社会貢献活動に取り組んでいる。

★次回はJICA栃木デスクで活躍している、倉熊百合子さんを紹介予定です。

## 東ティモールOB・OG会を立ち上げました

## JICA海外協力隊 東ティモールOB・OG会「Ajuda malu」

代表: 城戸大樹 (2016年度1次隊 環境教育)

発足: 2021年7月1日

HP: <https://www.timorlestejocv.net>

Facebook: @TimorLesteJOCV

この度、JICA海外協力隊 東ティモールOB・OG会「Ajuda malu」を立ち上げました。団体名「Ajuda malu」は、現地で話されているテトゥン語で「助け合う」という意味です。2021年4月に現地で発生した洪水被害を知ったOB・OGが「帰国後も東ティモールのために何かできる場はないか。一人よりも同じ思いのメンバーで何かできることはないか」と思ったのが立ち上げのきっかけです。

隊員の活動や東ティモールの紹介・在日東ティモール人との連携など、日本と東ティモー

ルの架け橋となるような活動を通して、JICA海外協力隊で築いた経験を両国の発展のために社会還元することを目的に立ち上げました。

現在は、ウェブサイトやFacebookでの情報発信がメインの活動となっていますが、これから少しでも多くの方に東ティモールのリアルな情報をお伝えしていきたいと思っています。



🐦 ありがとうございます 🐦

(10月16日～11月15日)

【ご入会】

野毛坂グローバル 様

【協力隊グッズ送っていただきました】

丸川 祐子 様 (制服、トレーナー)

大塚 豊彦 様 (20年記念切手)

土井 章 様 (ハンドブック他)



## JICA海外協力隊 第5回 全国OV教員・教育研究シンポジウム

「協力隊を  
日本の文化にする」

～途上国経験を通して得られる力の活かし方～

途上国での人づくり・国づくりに関わった経験を日本の教育の場で活かすため、全国の仲間が集い、多文化共生やグローバルな視点で実践を交流するとともに、これから派遣される教員に役立つ情報と元気を共有する。

日時: 2021年12月26日(日) 13:00～16:50 受付12:45～

場所: オンライン開催(オンライン会議ツールzoomを予定) 定員: 250名(先着順)

内容: 【実践報告】横正智OV(山形大学付属小学校教諭)(2001年度2次隊、バヌアツ、小学校教諭)

【講座】丸山一則氏(兵庫県立免野高原野外教育センター所長)(1988年度3次隊、ホンジュラス、技術科教師)

佐藤真久教授(東京都立環境学部、全国OV教員・教育研究会顧問)

【ワークショップ】ブレイクアウトセッションで参加者の交流

主催: 全国OV教員・教育研究会※、独立行政法人国際協力機構(JICA)青年海外協力隊事務局

後援(予定): 文部科学省、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、ESD活動支援センター

※JICA海外協力隊経験を持つ教員が、その経験を教育の場で活かすことを一緒に考え、取り組んでいくために立ち上げた研究会です。



【問い合わせ先】JICA青年海外協力隊事務局  
人材育成課 E-mail: [jvthd@jica.go.jp](mailto:jvthd@jica.go.jp)



## 明治安田生命

ひとに健康を、まちに元気を。

明治安田生命



2020 マイナビビジネスフォトコンテスト 応募作品「僕らの宝物」(山田陽香さま・静岡県)

なんでも楽しんでしまおう。  
それがうちの家族。サイコーね。

今日も誰かとつながる地域社会を。



「地元の元気プロジェクト」  
についてはこちら



相互会社の特長を活かした  
新たな配当をはじめました



明治安田生命保険相互会社 〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-1-1 [www.meijiyasuda.co.jp](http://www.meijiyasuda.co.jp)